

お稲荷様と私の  
ほっこり日常レシピ

夕日風 Nagi Yuhi



アルファポリス文庫

## 目次

### プロローグ

第一章 お稲荷様と初心者カレー

第二章 お稲荷様と初心者お鍋

第三章 お稲荷様と初心者ローストビーフ

第四章 お稲荷様と初心者お弁当

閑話 お稲荷様の独り言

### エピローグ

番外編 猫に手を貸し、猫の手も借りた話

5

22

48

103

167

239

281

286

## プロローグ

新宿駅から快速列車で二十五分。都内とは思えないくらいの緑と山々に囲まれたとあるベッドタウンに私——古橋ふるはしはるか住んでいる。古橋家は代々この土地に住んでおり、私で六代目なのだろう。そのそれなりに長い歴史を想像させる風格ある日本家屋の庭の片隅には、小さなお社がある。

子供の両手で囲ってしまいそうな小ぶりで古めかしいお社には、我が家の守り神であるお稲荷様が住んでいる……らしい。戦争の時には傷つかないようにと、わざわざ地下に安置用の穴を掘って保管していたくらいに大事にされているものなのだ。

私は高校から帰ると、いつもの日課であるお稲荷様へのお供えをしに庭へ出た。お稲荷様への一日一度のお供えは私の仕事だ。

外に出るとぴゅっと乾いた音を立てて北風が吹き抜ける。その冷たい息吹に、私は

ぶるりと身を震わせた。

体を擦って暖を取りたいけれど、手にはお供え物のお盆を持っている。早くお供えをして部屋に戻ろう。そんなことを考えつつさくさくと玉砂利を踏みつけながらお社に向かうと、それはいつも通りの閑かな佇まいでそこにあった。

少しくすんだ赤色の屋根、白木の色が美しい木の扉。その扉を開けると中には可愛らしいお稲荷様の像が鎮座していることを、私たち家族は知っている。それは一見して、ふつうの神社のミニチュア版といった趣だ。

「お稲荷様、お稲荷様。こちらが今日のお供え物です」

私は恭しく言う、お社の前に設置された石台の上にお盆を置いた。お供えといっても昔話のように油揚げなどではなく、私たち家族が食べる夕食と一緒のご飯だ。

今日のメニューはお母さんが作った肉じゃがとだご汁である。ほくほくと美味しそうな湯気を立てるそれを、自分が作ったわけでもないのに得意げな気持ちで眺めてから、私はお稲荷様が喜んでくれることを心の中で祈るのだった。

『コン』

お供えが終わると今日も小さく狐の鳴く声が聞こえた。

私がお供え係をはじめたのは中学二年生の時からである。この声はお供えをはじめた頃から、私には聞こえていた。最初は気のせいかと思っていたのだけれど、お稲荷様と波長の合う一族の者にはこれが聞こえやすいのだと、二年前に亡くなった祖母が言っていた。古橋家の血筋だけど父には聞こえないらしく、父はそれを非常に残念がっている。

「まあ、聞こえてもなにはあるってわけじゃないけど……」

私は小さくつぶやいてからお社を後にし、縁側から居間へと入った。

「今日もお稲荷様の声は聞こえた？」

炬燵こたての上にお供え物と同じ内容の食事の用意をしながら母が話しかけてくる。私はかじかむ手を擦り合わせながら炬燵に入ると、こくこくと頷いてみせた。炬燵の熱により、外で冷えた体がじわりと温まっていく。安堵感から漏れるものにも似たため息を、私はほっと漏らした。

「うん。今日も『コン』って言ってたよ」

「いいわねえ、私も聞いてみたいわ」

母はそう言いながら本当に残念そうな顔をする。

……お稲荷様の声が聞こえてもいいことがあった試しはないし、本当にいるんだなあとと思う程度のことなただけ。

「そうそう、はるか、話があるのよ」

「いただきます」と言って食事に箸をつけようとした時、母が真剣な顔でそう切り出した。なんの話かは知らないけれど、とにかく今はお腹が空いている。高校二年生は食べ盛りなのだ。

「……食べながら聞いてもいい？」

「いいわよ、お母さんも食べながら話すから」

母もそう言って炬燵に入ると、だご汁を口にしてからほっと息を吐いた。

「そのね、お父さんが何年か海外に赴任することになって。あの人、一人じゃなんにもできないでしょう？ お母さんについていこうかと思ってるの」

話の内容を聞いて私は掴んだジャガイモを箸から取り零した。

——海外に、赴任？

「お母さん。私、志望校決まってるんだけど」

来年、私は受験生だ。海外赴任になんてついていっている場合じゃない。

「うん。だからはるかには申し訳ないけど、しばらく一人暮らしをしてみたらおうかなって。心細いだろうから、時々未散くんにも様子を見に来てもらおうと思うんだけど」

母はそう言うとし訳なさそうに眉尻を下げた。

「未散兄ちゃんが来てくれるの？」

従兄弟の未散兄ちゃん私の初恋の相手、現・想い人だ。関係を進展させたい私にとって、この父の海外赴任はチャンスなのかもしれない。

「——まあ、いいよ。お留守番してあげる」

そっけなく聞こえるように返した私を母がなんだかニマニマとしながら見ている気がするけど、私はそれを無視した。

こうして私は、この家で一人暮らしをすることになったのだけれど。

その結果、非常に日常的な『怪異』と関わることになるのだ。

通学が楽だからという理由で選んだ高校の門を抜けて、私は急ぎ足で帰途に就いて

いた。今日は両親の出発前の最後の食卓。しばらくは家族でそろってご飯を食べる、なんてことはできなくなるから、今日はなるべく早く帰りたい。

家に着くと、『古橋』という仰々しい木の表札がかけられた門の格子扉を少し軋ませながら押し開け、庭の松の木などから漂う濃い草木の香りが立ち込める玄関までの道を歩く。

価格が安い時代に運よくこの土地を買えたので、古橋家の敷地は広い。現在のこの地域の地価相場を聞いた時には驚いたものだ。これもお稲荷様の加護なんだろうか。

玄関の引き戸を開けると、お肉の焼けるよい匂いがふわりと鼻先をかすめた。今日のご飯は牛肉の野菜炒めかな。その匂いを嗅ぎながら、私は晚ご飯の中身を推測する。玄関には母の履物の他に、父のくたびれた革靴が乱雑に脱ぎ捨ててあった。それのため息をつきながらそろえ、自分の靴を並べてから、私は上がり框に足をかけた。

「ただいま」

「はるか、おかえりー。いつもより早かったわねえ」

台所の方向に声をかけると母の軽やかな返事が返ってくる。この声もしばらく聞けないと思うと、なんだか感慨深い。

父からの返事はないので、おそらく炬燵で寝てしまっているのだろう。耳を澄ますと、居間の方から予想通り微かなびきき聞こえた。

「うん。出発前夜だし、さすがにね」

そう言いながら二階の自室へと上がり、スクールバッグをボンとベッドの上に放る。そして赤いチェックのスカートと紺色のジャケットの制服を脱いで、部屋着に着替えた。鏡を確認しながら背中までの黒髪をシュシュで一本に束ね、階段を下りて台所に向かう。入り口から中を覗き見ると、食事の準備をする母の華奢な背中が見えた。

「なあに？ つまみ食いに来たの？」

母は私の気配に気づくとこちらをちらりと見て含み笑いを漏らしながらそう言った。「ううん、お手伝い。なにかすることある？」

私は、料理をあまりしたことがない。こうやって母の横からたまに手伝いをする程度だ。そんな私がいきなり一人暮らしだなんて大丈夫かなという心配はあるけれど、レシピ本やレシピサイトを見ながらならきつとなんとかなるだろう。そういうところは私は楽天的なのだ。

万が一自分に料理の才能がなくても——少なくとも、従兄弟の未散兄ちゃんが来

てくれる日は美味しいものが食べられる。未散兄ちゃんとは私と違って料理上手だ。

「じゃあ、この皮を剥いて？」

母はそう言いながら茹で上がったジャガイモが入った箸をこちらに差し出した。それは見るからに熱そうで、私は思わず辟易とした顔をしてしまう。

「切れ込みを入れてるから、両手で引つ張るだけで剥けるわよ。冷えると皮が剥けにくくなるから、早くやる」

「ふえーい」

私は唇を尖らせて返事をする、ジャガイモの皮を剥きにかかった。このジャガイモはポテトサラダになるそう。プチトマトや潰した茹で卵が入った母のポテサラは私の大好物だ。「あちあち」と小さくつぶやきながら、ジャガイモの皮を両手で引つ張る。すると母の言う通りつるりと皮が剥け、ほくほくと美味しそうな湯気を立てる白色が茶色の皮の下に現れた。

「うわ、美味しそう。このままバターを塗って食べたい」

「ほら、バカなこと言っただけ早く剥く」

「ふえい」

母に急かされ、生唾を飲み込みながら残りのお芋を剥いていく。ふと視線を感じて隣を見ると、母がなんだか不安げな表情でこちらを見つめていた。

「ちゃんとはるかに料理を教えておけばよかったわねえ。はるかの料理で、お稲荷様はご満足するのかしら」

「うっ……」

深刻そうにため息をつかれ、私は言葉に詰まってしまった。

そう。今までのお稲荷様へのお供え物の支度は祖母の存命中は祖母と母が交代で、祖母が亡くなってからは母一人で行っていた。

……私と父は完全にノータッチの役立たずである。

言い訳をさせてもらうと、今年の夏まで私は部活で忙しかった。都内の高校の中でも上から数えられるくらいに強いバスケット部でレギュラーだったのだ。けど夏にあった練習試合でアキレス腱を断裂してしまい、部活は当然そのまま引退。受験勉強に勤しみながら、今まで母に任せっきりだった家事を手伝おうかと思っていた矢先に、この海外赴任が降って湧いたわけだ。

「まあ、やりながらなんとか覚えていくよ。私だって不味いものが食べたいわけじゃ

ないし」

そう言いながら、私は最後のジャガイモをつるりと剥いた。

「そうよね、うん。はるかには私の子だもの。料理もきつとすぐに覚えるわね」

「お母さんのレシピノートとかないの？」

そう訊ねると、母は困った顔をした。

「ふだん食べているものは慣れと勘で作っちゃってるから、そういうものはないわねえ」

……そっか。じゃあ本当に一から模索していくしかないのか。

それはそれできつと楽しいだろう。お稲荷様にはしばらく美味しくないものを食べさせてしまうかもしれないけれど。

愛らしい声で『コン』と鳴くあのお稲荷様を思うと、少し申し訳ない気持ちになる。

「さ。今度はこれを潰して」

ボウルに入れたジャガイモを母に手渡され、私はそれを木べらでざくざくと潰した。



「じゃあ、行つてらっしゃい！」

翌日。私は父と母を空港で見送った。娘にべつたりの父は、その細い目を涙で潤ませていた。それを見ていると私も泣きそうになったけれど、ぐつと堪えて笑顔で二人に手を振った。

空港から我が家までは片道二時間近くと、そこそこに遠い。高速バスに乗って東京駅に行き、中央線へと乗り継ぐ帰り道だ。時刻はちょうど帰宅ラッシュの時間だったけれど、始発だったので運がいいことに椅子に座ることができた。暖房で暖かな電車の中でほっと一息ついたとたんに——ふっと気が緩んだ。

「う……」

私は数年、一人で過ごすことになる。いくら未散兄ちゃんが来てくれるといっても、毎日というわけじゃない。広いあの日本家屋で一人きりなのだ。それを考えると急に、胸に寂しさが募った。

涙がせり上がり、頬をぼたぼたと伝っていく。

昨日食べた、母と作ったほくほくのポテサラ。甘辛い味つけの牛肉の野菜炒めの味。



父と母の笑う顔。ぐるぐるとそれらが脳裏を巡って、マドラーでかき回したみたいに感情を激しくかき混ぜる。

「ううっ」

嗚咽が口から漏れそうになり、私は慌てて手で口を塞ぐ。目の前に立ったサラリーマンのおじさんが、こちらが泣いていることに気づくと気まずそうに目を逸らした。なんだか申し訳ない気持ちになって、さらに泣けてしまう。

暗い窓ガラスに映る自分は、自己憐憫に酔った、同情してほしいと言わんばかりの女のように見える。そんな情けない自分の姿を衆目に晒しているのが恥ずかしくて、私は涙を止めようと歯を食いしばった。

——その時、ふわりと頭を撫でられた。

優しい手は、何度か頭を撫でた後にゆっくりと離れていく。私は驚いて勢いよく顔を上げ、周囲を見回した。

私が座っているのは一番端っこの席で、唯一隣に座っているOLのお姉さんは疲れているのか大口を開けて爆睡している。目の前のおじさんはつり革に両手で掴まっていて、気まずそうに目線を逸らしたままだ。

「霊現象？」

涙声で思わずばつりとつぶやくと、耳元でなんだか不満そうな『コン』という鳴き声が聞こえた。

……お稲荷様だ！

そう気づいた瞬間。心にじわりと温かい気持ち広がりが、涙が急に引っ込んだ。そう、私は一人じゃない。姿は見えないけれど、ずっと一緒にいたお稲荷様がいる。帰ったら、ご飯を作ってお供えしなきゃ。……美味しいものが作れるかは、わからないけれど。

家に着いた頃には、時刻は夜九時になろうとしていた。近所のスーパーにも寄って帰ったので、帰宅がなおさら遅れてしまったのだ。

「今夜はカレー。これならたぶん、私にも作れるはず。中学生の時に授業で作った記憶もあるし……おぼろげにだけ」

ビニール袋からガサガサと材料を取り出して、シンクの隣の台にざっと広げる。そして、カレーのパッケージの裏に書いてある作り方と睨めっこした。

カレーは便利だ。こうして箱の裏に作り方が書いてあるんだから。スマホでいちい

ち確認しながら作らずに済むなんて万々歳である。

「ふむふむ。野菜を切って、お肉と炒める」

まずは人参を取り出すと、よく洗ってから皮ごと輪切りにする。ちよつと不格好な形になってしまったけれど、煮込んでしまえば大丈夫だろう。そういえば人参って皮を剥くんだっけ？ まあ、いいか。切ってしまったし。

ジャガイモも……皮を剥かないといけないんだろうか。これも面倒だから、剥かなくていいか。皮つきのじゃがバターなんてものもあるから、きつと大丈夫。玉ねぎはさすがに剥くけれど！

「うわ！ 沁みるっ！」

包丁を入れると、玉ねぎの成分が空気中に散って容赦なく目を攻撃する。帰り道とは別の理由で、私はまた涙をぼろぼろと零した。こんなものは早く終わらせようと、玉ねぎは手早く切ってしまう。少し一片が大きい気もするけれど、これも煮込んでしまえば大丈夫のはず。

「おお、それっぽくなってきた！」

ボウルに刻まれた野菜たちを入れて、私は得意げな気持ちになった。なんだ、やれ

ばできるじゃない。お肉はちゃんとカレー用と書いてある牛肉を買ってきた。これで間違いないだろう。

鍋を熱して材料をぜんぶ放り込む。そして木べらで数分炒めてから、お湯を目分量で入れた。計量カップの場所なんて、知らなかったのだ。後で探そう。

まあ、なにはともあれ、あとは煮込んでルウを入れれば完成だ。

「料理なんて、簡単じゃない。そういえば煮込み時間って何分だっけ……。あ、箱。捨てちゃった。まあ適当でいいか」

五分ほど煮込んだ後に鍋の蓋を開けると、灰色のなにかが表面に浮かんでいる。これが旨味成分というヤツだろうか。

私はルウをふた欠片入れると、ぐりぐりとおたまで鍋をかき回した。

「そうだ！」

チンするご飯を温めるのも忘れてはいけない。電子レンジにご飯を放り込むと、六百ワットで二分を選択。炊飯器？ 明日になったら、使い方を覚えるつもりだ。

——なんて完璧なんだろう。

台所に漂うカレーの匂いを嗅いでいると、なんだか誇らしい気持ちになってくる。

ご飯が温まったことを告げるピーツという電子レンジの音が、私を祝福するファンファールのようにも聞こえた。白いお皿にご飯とカレーを盛りつけて、私はお稲荷様のもとへ向かった。

「お稲荷様、お稲荷様。こちらが今日のお供え物です」

いつも通りの口上を述べて、お社の前の石台にカレーを置く。

すると少しの間の後に、ざわりとなにかが蠢く<sup>うごめ</sup>気配がした。私を取り巻く空気が、なんらかの質量を含んでずしりと重くなり、そのまま肩へのしかかってくる。私はその重さに耐えきれず、ひれ伏すように地面に両手をついた。重い空気が触れた肩から、ぞわぞわと這い上がってくるような悪寒が広がる。

「なに!？」

誰かの怒りが空気を伝播<sup>でんぱ</sup>してくる。そのことに私は激しい動揺を覚えた。

逃げ出したくても体が重く、次から次に冷や汗が溢れ、頬や額を流れていく。

ギ、ギ、ギ……

小さく軋む音を耳にして、私は唯一動かせる目を動かした。するとお社の木の扉が……少しずつ開くのが見えた。そして隙間から、鈍く光る金色の瞳が覗く。

——あり得ない。

あそこには人どころか、猫一匹すら入る隙間はない。では『あれ』はなんなのか。全身の肌が粟<sup>あわ</sup>立ち、歯の根が合わない。私はなにか、お稲荷様を怒らせるようなことをしてしまったのだろうか。

一陣の風がぴゅつと笛のような音を立てて吹き抜けた。それにつられるように社の扉が一気に開き、中にいたなにかが飛び出してくる。

私はあまりに恐ろしくて、ぎゅつと強く目を閉じた。

「不味い! こんな不味いものは、はじめて食ったわ! このバカ娘が!」  
そんな私の頭上に降ってきたのは……怒りに満ちた、男の人の声だった。

## 第一章 お稲荷様と初心者カレー

「はっひえええ！ お社に不審者ああ！」

「誰が不審者だ！ たわけ！」

恐怖で悲鳴を上げると、また怒号が飛んでくる。

おそろおそろの下に向いていた視線を少し上げると、白い足袋と赤い草鞋を履いた足が見えた。

——足袋に草鞋……？

現代日本であまり見ないそのアイテムに首を傾げながら、視線をゆつくりと上げていく。すると緋色の袴が目に入り、その次に……ふかふかの銀の尻尾が見えた。

「……尻尾？」

「いつまで這いつくばっているつもりだ」

横柄で不機嫌そうな男の声が唸るように言葉を紡ぐ。そして両脇に手を差し込まれ、

私は子供のように持ち上げられた。

「うわ！ なにすんの！ 痴漢！ セクハラ！」

「痴漢？ 守り神に対して、なんという口をきくのだ！」

……守り神？

その言葉にハッとして、私は改めて男の姿を確認した。

この世のものとは思えないくらいに整った顔がまず目に入る。次に美しい金色の瞳と、煌めく銀色の髪が。狩衣と云うのだろうか。白の上着のようなものの下に緋色の着物と袴が覗いていて、まるで神主さんのような服装だ。

そして男性の頭の上には——本物としか思えない狐の耳が鎮座していた。それはびるびると愛らしく動いている。

まさか、この人は……

「……お稲荷様？」

私は半信半疑で、その名前を口にした。

「そうだ。このバカ娘」

推定お稲荷様らしい男性は尊大な態度でそう言う、ふんと小さく鼻を鳴らした。

「……嘘だあ」

思わず小さく声を漏らすと、お稲荷様の眉間に深い皺しわが寄る。せっかく綺麗な顔を  
しているのに、不機嫌な表情で台無しだ。

「なぜ、嘘だと思う」

「その。もつと違うお姿を想像してたんですよ……」

それに、精巧なコスプレの不審者っていう可能性もまだぜんぜん捨て切れていない  
し、という言葉は私は呑み込む。それを言えば、また桐喝どうかくされと思ったからだ。

先ほどの怪奇現象のことも踏まえて、ひとまず彼が本物のお稲荷様である、という  
前提で考えるとして……いつもあんなに愛らしい声で『コン』と鳴いて食事を喜んで  
くれるお稲荷様が、こんなふうに脅かしてくる成人男性だなんて。

それは……非常に残念なことだ。

「もつと小さくて可愛くて、ふわふわした毛玉みたいな小狐を想像してたのに……」

ついついそんなぼやきが漏れる。それを聞いたお稲荷様は臍へそをつり上げた。

「あいにく小さくも毛玉でもない。それよりも……なんだ、あの不味い飯は」

お稲荷様はそう言うと、私が作ったカレーにちらりと目をやる。

「……不味かったですか？」

「おぬし、自分で味は見とらんのか？」

地面に下ろされ、食ってみるとばかりにカレーを顎で指し示された。

……いくら私が料理初心者だからって、カレーがそうそう失敗するわけないじゃ  
ない。

我が儘ままなお稲荷様だと思いながら、お社に近づきカレーをスプーンで掬すくう。お腹も  
空いていたので、それを思い切り頬張った。

「うわっ。不味い」

……口にしたカレーは、驚くくらいに不味かった。

まず、ルウが足りていないようで味が薄い。そして野菜の切り方が大きすぎたのか、  
煮る時間が足りなかったのか、中にぜんぜん火が通っていない。ジャガイモは口の中  
でジャリジャリするし、人参は半生どころじゃない生だ。それを噛めば噛むほど、青  
臭さがじわりと口中に広がった。

肉が生じゃないのが唯一の救いだろうか。

吐き出しそうになるのを堪え、懸命に咀嚼そしぐしぐつと飲み込む。食べ物を粗末にして

はいけないのだ。

……これは、怒られても仕方がないかもしれない。

「……不味かろう」

お稲荷様は哀愁を帯びた瞳で私を見つめる。私はコクコクと、涙目で何度も頷いた。  
「これは、とても不味いですね。びっくりしました」

「……私も驚いたぞ。つい、人間の前に姿を見せてしまうくらいにな」

……私のご飯が不味かったせいで、お稲荷様はすっかり姿を現したのか。それは申し訳ないことをしてしまった。

「作り直せ、今すぐ」

お稲荷様は尊大な口調で言う、ふわりと宙に浮かんであぐらをかく。そして大きな尻尾を不機嫌そうに振った。その姿を見て、私はあんぐりと口を開けた。

こんな不可解な力を使う人間がいるはずがない。これで『精巧なコスプレの不審者』という線は、完全に消えたわけだ。

しかし、作り直せと言われてもなあ……正直、どうしていいのかわからない。

「お稲荷様！」

「……なんだ」

意を決して呼びかけると、お稲荷様はうるさいと言わんばかりに銀色の耳をぴるぴる動かしながら返事をする。

「お稲荷様はこの家の者を助け、見守る存在なんですよ」

「まあ……そうだが」

洪々という口調で返され、胡乱な目を向けられる。そんなお稲荷様に、私は一歩一歩とにじり寄った。

「私、今すぐ……困ってるんで、助けてください！」

「だからどうして、こうなるのだ！」

「大事な古橋の家の者が困ってるんですから、お手伝いくらいしてくださいよ」

私は、再び台所に立っていた。

……今度はお稲荷様と二人で。

一人で知恵を振り絞っても、この事態の解決方法なんて浮かばない。そう判断した

聡明な私は、お稲荷様のお知恵を借りようと思ったのだ。

お稲荷様のお社は古橋家五代——私で六代目になる——にわたって受け継がれてきたものだ。お稲荷様は少なく見積もっても、その受け継がれた分の時間を生きていることになる。

そんなに長く生きているんだから、私よりいろいろな経験をしているよね。きっといいアイディアも授けてくれるはずだ。

お稲荷様は不機嫌そうにしているけど、私の隣に立って、硬い野菜が浮いたすつかり冷えたカレーの鍋を見つめている。文句は言いつつもちゃんと母の可愛いエプロンまで着けているのだから、案外律儀な人なのかもしれない。

「食べ物を捨てるのはもったいないと思うので、これを美味しく再生する方法を二人で考えましょう！」

「これが、まともな飯になるのか……？」

ぺしよりと大きな銀色の耳と尻尾が垂れる。先ほど怒鳴っていた時の覇気はなく、どこか元気もない様子だ。いつものご飯の時間はとくに過ぎているので、お腹が減っているのかもしれないな。

——彼は人間の私から見て当然『異質』だ。

なのにすでに警戒心が薄れているのは、彼が、私が生まれた時から側にいたお稲荷様だからなのかな。あの愛らしい『ゴン』というお札をこの人が言っていたのだと思うと、怖がるのもバカらしくなってしまうのだ。

「しばらく母は戻りませんし。二人で知恵を絞って、この苦境をどうにかしないと……ご飯がずつと美味しくないままですよ」

「娘と小僧が家を空けることは知っていたが、まさか数年もおらぬとは。なぜ、小娘に料理を仕込まずに行ってしまったのか……」

「急に決まった海外赴任でしたしねえ」

「おのれ、カイガイフニン……！」

お稲荷様はそう言うと、悲しげに大きな尻尾を揺らした。

娘って、母のことだね。長生きなお稲荷様からすると、三十代の母も『娘』扱いらしい。母が聞いたら喜びそうだ。小僧は父のことだろう。くたびれたサラリーマンである父と『小僧』という響きはなんともミスマッチだ。

そして『小娘』が……私か。お稲荷様には名前を覚えるという習慣はないのだから

うか。

お稲荷様はどうして、うちの守り神になったのかな。

そんなことが、ふと気になった。

昔はお稲荷様と古橋家のことを記した先祖の手記があったそうなのだけど……先の大戦の時に焼けてしまったのだ。

手記の詳しい内容を覚えていただろう曾祖母は祖母が幼い時に病で亡くなっており、曾祖母から口伝でしかその内容を聞いていない祖母の記憶は断片的だった。

そしてその祖母も、二年前に亡くなっている。

せっかくお稲荷様とお話ができるようになったんだし、いずれ聞いてみたいな。

……それよりも、まずは目先の食事だよ。

私は鍋に目を向ける。そして次に、お稲荷様に視線をやった。

どうしましようか、という思いを込めつつ見つめていると、お稲荷様がふーっと大きなため息をつく。

「……ひとまず、もつとよく煮込め。あれでは食べたものではない。野菜に皮がついておったし、できれば少し長めに」

そしてそう口にしたのだった。

言われた通りにくつくとろ火で煮込んでいると、野菜がくったりとしてきたような気がする。生々しさを主張していた玉ねぎはしんなりとし、ジャガイモは見るからに柔らかそうだ。……人参だけは、見ただけじゃわからないけれど。

「お稲荷様。この人参、いけると思います？」

「味見してみればいいだろうが」

「……それもそうですね」

先ほどの青臭い味を思い出して少し躊躇したけれど、味を見ないとまた悲劇が起きそうだった。おたまで人参を一つ掬うと、それを指でつまんで口に入れた。そしておそろおそろ咀嚼する。

……柔らかい。ちゃんと煮えてる。

私は心底安堵した。これは食べられるものだ。

「ちゃんと煮えています！ お稲荷様！」

「煮えておるのがふつうだ。たわけが」

じろりと金色の瞳で鋭く睨まれてしまった。そうですね、申し訳ありませんね！



「これにルウを足したら今度はちゃんと食べられるカレーに……なると思います。たぶん」

一度失敗したので自信満々には言えないけれど、そのはずだ。ルウをふた欠片<sup>かけら</sup>投下して、ぐるぐると鍋をかき混ぜる。すると鍋の中身が、とろりとした重みを増した。

「もうひと欠片<sup>かけら</sup>くらい足したらどうだ。鍋の中身が多すぎる」

お稲荷様の言う通り、私が入れた材料は規定量より多いようだ。

「なるほど。では、入れてみます」

もうひと欠片<sup>かけら</sup>ルウを足して鍋を混ぜていると、お稲荷様がまた口を開いた。

「小娘。火を点けたままだと、溶けにくそうだ。一旦火を止めてから混ぜてみてはどうだ」

「お稲荷様、素晴らしい観察眼です！ 慧眼<sup>けいがん</sup>というやつですね！」

「……ふん。それほどでもない」

口調はツンとしつつも、お稲荷様の表情は少し嬉しそうに見える。銀色の大きな尻尾は左右に振られ、耳もぴこぴここと動き忙<sup>せわ</sup>しない。

狐って、イヌ科だったわけ。尻尾の役割は犬と同じなのかな。これは、褒められて嬉しがっている……と思っていいのだろうか。

「ルウも溶けたっぽいですし。そろそろ完成、ということでもいいですかね？」

「……いや、もう少し煮込もう。先ほどのことがあるからな」

「確かに……」

先ほどの不味いカレーのことを思い返し、弱火で再点火する。

……今度こそ美味しいカレーになりますように！

そんなことを願いながら五分ほどさらに煮込み、ご飯をチンして皿に盛り、カレーを上からかけると――

そこには『ふつうのおうちカレー』が鎮座していた。

野菜は皮つきだったりサイズが不揃いだったりで不格好だけれど、食べられそうな風格を感じる。素晴らしい！

「おおっっ！」

私とお稲荷様は思わず歓声を上げた。

ノリでハイタッチをしようとしたら、こてりと首を傾げられる。どうやらお稲荷様

は、ハイタッチを知らないらしい。行き場のない私の両手がふわりと宙をさまよっただけになって、少し恥ずかしい。

「できたのなら、それを社まで……」

「いや。せっかくですし、一緒に食べましょうよ」

帰ろうとするお稲荷様の尻尾を掴んで引き止める。するとお稲荷様は、苦虫を噛み潰したような顔になった。

「なぜ……一緒に食べねばならぬのだ」

「そりゃ、寂しいからですよ」

一人でいるのはやっぱり寂しい。

旅立つ父と母を見送って、私はそれを実感した。

図々しいことは百も承知しているけれど、そんな私にお稲荷様の存在は渡りに船である。食卓は、やっぱり誰かと一緒にいいのだ。

たとえそれが、人外であったとしても。

人でないとはいえ、お稲荷様は我が家の守り神だ。一緒に過ごした十数年の間に、彼が悪さをしたことはない。だからおそらく大丈夫。

私は考え方の根っこが楽天的なのだ。

……友人には、考えなしとも言われるけれど。

「一緒に食べてくれるなら、お酒も出しますよ。お父さんが置いていったのがたくさんあるので！」

ワインセラーには大量のワイン、棚には焼酎しょうちゅうが並び、我が家にはいろいろなお酒がある。お稲荷様に捧げたのなら、お父さんも怒りはしないだろう。……とはいえ、高そうなのは一応避けるけど。

神様への捧げ物としても、お酒は定番だもんね。御神酒おみきなんてものもあるくらいだし。

「くっ、酒か！」

お稲荷様は私から見ても丸わかりなくらいに、ぐらぐらと気持ちが揺れているようだ。よかった、お酒が好きみたいで。

「お稲荷様……」

あとひと押し、ときゅうと狩衣かりぎぬの端を掴んでじっと見つめる。するとお稲荷様の表情は、気まずそうなものになった。

「……す、少しだけだぞ！」

お稲荷様は大きな大きなため息をついた後に、眉間にぎゅつと皺しわを寄せながらそう言った。

「わあ！　ありがとうございます！」

「本当にお前は……。私を恐れるわけでもなく、崇あがめるわけでもなく……。おかしな小娘だ！」

……そうだ、先ほどから気になることがあったのだ。

「はるか」

「ん？」

「私、はるかと言います。そう呼んでください。お稲荷様のお名前も、教えてください。と嬉しいです」

私には親がつけてくれた素敵な名前があるのだから、ちゃんとそれで呼んでほしい。お稲荷様の主義的にそれが不可能な場合は、小娘のままでも別にいいけれど。

「わかった、はるかだな」

断られる想像もしていたのだけれど、お稲荷様はあっさりと私の名前を呼んでくれ

た。おお、名前を呼ぶ習慣自体はあったのか。

「お稲荷様のお名前は？」

「仲間内ではぎんいろと呼ばれている」

仲間内って、他のお稲荷様のことかな。稲荷神社は、全国にたくさんあるもんね。

どんな字を当てるか訊いてみれば、音の通りの『銀色』でいいそうだ。……見たまんまの名前だな。

お稲荷様たちには名前を重視する習慣がないのか、それとも本当の名前を隠しているのか。なにはともあれ、呼べる名前ができたことは喜ばしい。

「では銀色様、ご飯を食べましょう！」

カレー皿を二つ持って居間に向かうと、銀色様も尻尾を揺らしながら私の後ろを歩いてきた。

炬燵こたつのスイッチを入れて、どうぞどうぞと彼に勧める。炬燵こたつははじめてなのか、最初は警戒していた銀色様も、足を入れた途端に「ほう」と息を吐いた。

「これは……なかなか」

「炬燵こたつは、はじめてですか？」

「目にしたことはあるが、入るのははじめてだ。こんなに心地がよいものだとは……」  
天板に頬をぴったりつけて、尻尾をぶんぶんと振る銀色様は……成人男性の見た目をした方に言う言葉ではないけれど、非常に愛らしく見える。

「銀色様。炬燵こたつもいいけど、ご飯を食あべましょう」

私はそう言いながら、棚に並んだ焼酎しょうちゆうを漁あさる。そしてスーパーやコンビニでも見る一般的な銘柄めいがらのものを手に取って、氷を入れたコップに注いで銀色様に手渡した。

「銀色様。お酒をどうぞ」

「焼酎しょうちゆうか。焼酎は好きだ」

ふんふんと中身の匂いを嗅いで、銀色様はほにやりと表情を緩めた。よかった、高級なものじゃないと口に合わない、なんてことはなくて。

「はるかか呑まんのか」

「呑みませんよ。私未成年ですし」

「ホーリツというやつか。人間は不便ふびんだな」

銀色様はそう言いながら、さっそく焼酎しょうちゆうをぐびりとあおる。そして紅い唇を舌でぺろりと舐めた。

「うん、美味い」

満足そうにつぶやいて、今度はカレーをスプーンに掬すくう。そしてどこか神妙な面持ちで、それを口に運んだ。

私は銀色様の反応をドキドキしながら見守った。今度こそ、お口に合うといいのだけれど。味見をした感じは、悪くないと思ったんだけどな。

銀色様はしばらく口をもぐもぐと動かしてから、カレーをぐくりと飲み込んだ。

「うむ、今度は食べられる」

ほっとした表情をした彼は、またカレーに口をつける。それを見て安堵感が胸に湧き、肩の力がふっと抜けた。

「ほれ、はるかも食べんか」

「あつ。そうですよね！」

お行儀悪くスプーンでこちらを指す銀色様に言われて、私も慌ててカレーに手をつけた。カレーはごく一般的な『おうちカレー』の味がする。だが、これがいいのだ。

「ちゃんと、美味しいですね」

「あとは米がふつうの米だったらなあ。レンジでチンする米とやらより、やはり炊き

立てが好きだ」

「……明日は、お米をちゃんと炊きますね」

スマホでやり方をきちんと調べてから炊こう。今日のような失敗をしたら、絶対にまた怒られる。そんなことを思いながらカレーを食べていると――

指先に、毛玉のようなものが触れる感触がした。

視線を動かしてそこらを見ると、ふわふわとした白い毛の小狐が私の周囲をうろついている。これは銀色様の……関係者？ かな。

恐る恐る抱き上げると、小狐は大人しく私の腕に収まった。

「か、可愛い……！」

もふもふだ。すっごい毛並みのいいもふもふだ。

「なんだ白丸、お前も来たのか」

銀色様しろまるがその小狐に声をかけると、小狐は鈴の鳴るような声で『コン』と鳴いた。

「うわー、白丸くんって言うんでちゅか？ もつふもふでちゅねえ！」

人はなぜ、可愛い生き物を目の前になると幼児言葉になってしまうのか。私は『白丸くん』を抱きしめて、その柔らかな毛並みを堪能した。

白丸くんは大人しく私に抱きしめられていて、頬を時々ぺろぺろと舐めてくる。なんて可愛いお狐様なのだろう。

「……はるか。その気色の悪い言葉遣いをやめろ。白丸は神格に近い化け狐で、お前より五十年は長生きしておるぞ」

銀色様の言葉を聞いて、私はぼかんとした。

……この可愛いお狐様は、父母よりも年上らしい。神格に近いっていうのは、神様に近いということかな。

「そ、それは失礼を」

白丸くんを床に下ろして慌てて謝罪すると、気にするなというように指をぺろぺろと舐められる。

……可愛い、やっぱりもふもふしたい。

そんな気持ちで湧くものの、私は自重して頭を撫でるに留めた。ああ、本当に可愛いなあ。

「白丸にもカレーを出してやれ」

「え、でも。玉ねぎが……」

犬猫に玉ねぎをあげてはいけない。それは彼らにとつては毒なのだ。

「大丈夫だ。白丸はふつうの狐ではない」

「はあ、でしたら」

私は立ち上がると台所へ向かう。そして小さな皿に白丸くん用のカレーを盛った。カレーを持って居間に戻ると、白丸くんが白く大きな尻尾を振りながら私を見上げている。……語彙力を失うくらいに可愛いな。

床にカレーを置くと、白丸くんはそれをはぐくと小さな口で頬張った。そんな彼を横目に見つつ、だらしなない笑みを浮かべているだろう私もカレーを食べる。銀色様の食事は進んでいるようで、いつの間にやらお酒のコップも空に近い。

「もう一杯、呑みます？」

「うむ」

焼酎の瓶を持ちつつ訊ねると、銀色様は鷹揚に頷く。コップにまた焼酎を注いであげると、彼は嬉しそうに目元を緩ませた。

「白丸くんも、呑むのかな」

「まだ早い」

銀色様はびしやりとそう言った。

玉ねぎはよくて、お酒はダメなのか。さっきは私にお酒を勧めようとしたのに、銀色様の基準はよくわからない。

「じゃあ……白丸くん、オレンジジュース飲む？」

冷蔵庫にたしかあったはず。そう思っただけで、白丸くんは『コンコン』と二度鳴いた。これは『欲しい』ってことなんだろうか。

ひとまず台所に行って、自分と白丸くんの分のオレンジジュースを用意する。白丸くんのコップは浅いマグカップだ。これなら彼でも飲みやすいはず。

「はい、どうぞ」

居間に戻ってオレンジジュースを床に置くと――

白丸くんは床にべたりとお尻をつけて人間のように座り、ピンクの肉球のついた愛らしい両手でマグカップを挟んで持ち上げた。その光景を見て、私は目を丸くする。

そんな私を尻目に、白丸くんはカップからくびくびとジュースを飲む。そして満足そうにぺろりと口元を舐めた。

「白丸くん、器用」

「そりゃあな。見たまんまの小狐ではないからの」

銀色様はどうとう手酌<sup>てじやくしやく</sup>で焼酎<sup>しょうちゅう</sup>を注ぎはじめた。彼は本当にお酒がお好きらしい。カレ<sup>から</sup>ーの皿も空になっていたので「お替わりは？」と訊ねると、「くれ」と短い返事が返ってくる。

……銀色様って、見た目は二十代の美青年だけれど、会話をしていると偏屈なおじいちゃんを相手にしている気分になるな。そんな失礼なことを思いながらカレ<sup>から</sup>ーのお替わりを用意し、炬燵<sup>こたつ</sup>に入ってテレビをつける。

テレビでは、明日の夜は大雨になると、そんな予報を流していた。

「銀色様。明日の夜は大雨なんですって」

「ふむ。そうか」

「だからまた、うちでご飯を食べません？」

『大雨』と『だから』がどう繋がるのだ」

銀色様が眉を顰<sup>ひそ</sup>めてこちらを見つめる。綺麗な瞳に見つめられて落ち着かない気分になりつつも、私は口を開いた。

「冬に大雨なんて、明日は寒いに決まっています。炬燵<sup>こたつ</sup>に入って、ぬくぬくしながら

お酒を呑んで。そうしながらご飯を食べた方が、美味しく感じると思いませんか？」

「ぬう。炬燵<sup>こたつ</sup>、酒……」

銀色様は二つのワードにつられ、明らかな思案顔だ。よし、もうひと押し。

「デザートもつけます」

「でざあと」

「学校帰りにアイス——甘い氷菓を、買って帰ります。溶けて汚れちゃうから、アイスはお社の前に供えたこと、ないですよね？ 美味しいんですよ。冬に炬燵<sup>こたつ</sup>でぬくぬくしながら、冷たくてあまあいアイスを食べるの」

悩む銀色様の周囲を、白丸くんが『コンコン』と鳴きながらくると回っている。白丸くんの方は、もうすでにアイスを食べる気満々らしい。

「……仕方がない」

銀色様は大きな大きなため息をついて、明日も来ることを約束してくれた。

しばらく呑んでくつろいだ後に、銀色様は「帰る」とそっけなく言った。それを聞いた白丸くんも、私の膝の上から床へすんと下りる。

膝に乗せて、ずっと撫でていたんだよね。ああ……可愛いもふもふが去ってしまふ。

……銀色様に聞きたいことがいくつかあったのに、訊けなかったな。

——どうして、古橋家を守っているんですかとか。

——どうして、今まで姿を現さなかったのですかとか。

——一体、いくつなんですかとか。

——そのふわふわの尻尾を、もふもふしちゃダメなんですかとか。

一度に訊ねるとこのお稲荷様は臍<sup>へそ</sup>を曲げそうだから、少しずつ距離を縮めて訊いた方がいいのかな。

「あつ、そういえば！」

お社へ帰ろうとする銀色様にお見送りでついでいこうとして、お礼を言うことがあったのだと思い出した。

「銀色様、銀色様」

「なんだ」

名前を呼ぶと、銀色様は眉間に皺<sup>しわ</sup>を寄せながらこちらを向く。私は銀色様の前に立

つと、ぺこりと頭を下げた。

「今日は電車で励ましてくれて、ありがとうございました！」

頭を撫でて、『ゴン』と鳴いて。励ましてくれたのは、とても嬉しくて心強かった。あの時は……私は一人になるんだと思っていたから。

銀色様が視線をさまよわせる。そして足元の白丸くんをがしりと掴んで持ち上げた。

「あ、あれは白丸だ。私ではない」

白丸くんを見ると、彼はぶんぶんと首を横に振る。

「はあ」

「私では、ない」

銀色様はそう言うと、真っ赤な顔で、白丸くんを小脇に抱えて去ってしまった。私がついていく隙もない。

「あれは、照れてるのかな」

眉間に皺<sup>しわ</sup>を寄せてそうつぶやく私に返事をするのは、ぴゅうと吹く木枯らしだけだった。



## 第二章 お稲荷様と初心者お鍋

「銀色様〜!」

学校帰りにスーパーで食材を買って帰宅し、お社の前で名前を呼ぶと、社がガタガタと震えはじめた。そして小さな扉が開き、ぼん! という音を立てて白丸くんが飛び出してくる。

小さな毛玉は私の胸元にぺたりと張りつき、『コンコン!』と可愛い声を上げた。今日も白丸くんは可愛い。両手が食材でいっぱいだから、撫でられないのが口惜しいな。

雨が降るといふ予報の通りに、空は重たそうな鈍色にびいろをしている。早く家に入らないと降られるかもしれない。

「白丸くん、こんばんは。銀色様は?」

『コン!』

白丸くんが小さく鳴いて鼻先をお社に向ける。するとそこには、不機嫌そうな顔をした銀色様がいつの間にか立っていた。銀色様の不機嫌はデフォルトだとわかったので、今はそれほど怖くはない。

……せっかくお顔がいいんだから、愛想よくした方がいいのになーとは思うけど。

「銀色様、こんばんは」

「うむ。買い物してきたのか、ご苦労」

銀色様は不機嫌な顔をしながらも、私の両手にある重たそうなビニール袋を見てねぎらいの言葉をかけてくれた。なんだかんだで、悪い人ではないのだろう。

「今日はお鍋を作ろうと思うんです」

「……ふむ、鍋か」

銀色様の表情は暗い。きっと昨日のカレーのことを思い出しているのだろうな。本当に申し訳ないことをしたと、反省はしている。

「自分一人で美味しいものを作れる自信がないので、今日も見張ってください! 銀色様!」

「それは……また一緒に飯を作れということだな」

「お願いします！ 味つけに関しては市販の鍋の素を買ってきたんで、絶対に失敗し  
ませんよ！」

「……昨日のカレーのルウも、市販とやらだったのではないかと？」

「それを言われると、痛いですけどねえ」

そんな会話をしつつ、ぽんぽんと跳ねるように歩く白丸くんを先頭にして、私たちは庭から我が家へ向かったのだった。

「さて」

台所で鍋の材料を広げて思案する。スマホで調べて買った材料なので、これを切つて煮るだけで問題ないはずんだけど……そんな考えでカレーを失敗したからな。私は不信感漂う視線をこちらに向ける銀色様をちらりと見た後に、スマホを取り出した。

「野菜を……まずは洗う」

「そこからか！」

尻尾をぶわつと膨らませた銀色様が、激しい口調で抗議をしてくる。

「まさか昨日のカレーも……」

「大丈夫ですよ。ジャガイモは泥がついてたので洗いましたし」

「人参は？」

「……とりあえず、洗いましょうか。あつ、茸は洗わなくても大丈夫なんですって！」

呆れたようなため息をつく銀色様は置いておいて、私は材料に目を向けた。今日買ったものは鶏肉、えのき茸、白菜、水菜、豆腐である。そしてありがたい、鍋の素。シンプルなうま塩味とかそういうやつだ。キムチ鍋の素と悩んだのだけれど、白丸くんが食べられるかわからなかったし。

もちろん締め用のうどんも買った。これもお鍋の大事な構成要素だ。

「じゃ、私は白菜を洗って切りますので。銀色様は鶏肉を切ってください」

「なぜ……私が」

「暇そうだし」

そう言つて鶏肉のバックを渡すと、銀色様は今まで聞いたこともないような深い深いため息を漏らした。

「お前は不敬にもほどがあるのではないかと？」

「……………いえいえ、尊敬しております」

「なんだその間は」